発題Ⅰ

霊性の遍歴

―仏教からキリスト教へ―

提題者　奥村一郎

Ⅰ　出会い

一　禅との幸いな出会い

そのころ、誰がすすめてくれたのか覚えていない。ともなく、今に劣らぬ激しい受験競争の修羅場を乗り越えて、昭和十八年四月、旧制一高に入学、早々に手にした本が、当時、一高校長から抜擢されて文部大臣をしておられた橋田邦彦先生の著書、『正法眼蔵釈意』二巻であった。それが日本曹洞宗の開祖、道元禅師（一二〇〇―一二五三）に出会うきっかけとなった。

若さの気負いと多読乱読を競う風潮のなかで、旺盛な知識欲を道元の大著『正法眼蔵』一本に集中していけたことは私にとってひとつの救いになったともいえる。とくに、開巻第一章の「現成公案」は、初期にものされた（道元三十三歳）、比較的短いものではあるが、なお若かりし日の求道の魂を魅了するに十分であった。

ところで、その頃、一高から東大卒業後、まもなく出家、三島の龍澤寺の雲水修行に入り、山本玄峯老師に師事された中川宋渕老師による毎月十三日、後輩指導のため座禅を主とする小接心の機会があった。脛からはだしの足に厚い朴歯の下駄をはいて、「弥生道」の名で親しまれていた銀杏並木を三昧堂とよばれていた禅堂に向かう青年僧宋渕禅師の一分の隙もない、しかも、しずかなぬくもりさえも感じさせる、爽やかな後ろ姿は今も眼前に浮かぶ。

精神的揺藍期ともいえる、その若き時代に、私にとって三つ子の魂ともいえるものになったのは、まさしく、道元の「無所悟、無所得、只管打坐」の禅心であり、その曹洞禅の心を、修行の実際指導を通してはぐくんでくださったのが、臨済宗の師家、宋渕老師であった。

二　聖書との不幸な出会い

一高時代に所属していた学科は、ドイツ語専攻の学科であっ

た。そのため、ドイツの哲学や文学に接することが多く、また、その他の欧米思想についての知識を通じて感じとられてきたものは、西欧文化の根底にあるキリスト教の重みであった。そこで、キリスト教を知るためにはとりあえず、『聖書』から始めねばと思い、渋谷の道玄坂に出かけ、小さな古本屋でお粗末な青い表紙にザラ紙の新約聖書を購入した。どの本にしても、最初の一ページから読み始めるのはあたりまえ。ところが、そのあたりまえのことが、とんでもないことになってしまった。

「マタイによる福音書　イエス・キリストの系図」という小見出しで、次から次へと、舌ももつれるようなヘブライ語の名前が、たてつづけにでてくる（マタイ1：1－17）。

次には、「イエス・キリストの誕生」の次第が述べられる。まず、マリアの処女懐胎、それにつまずくヨセフの話。すると、ヨセフは夢の中で天使の荘厳な予言成就のお告げを受けて、マリアを妻として受けいれることを決意する……（マタイ1：18－25）。第二章に入ると、その幼な子イエスを訪ねて礼拝するために、三人の占星術の学者が、黄金、乳香、没薬の贈りものをもって、はるばる東方の国からやってくる。それも、星に導かれて、まずエルサレムにくる。そこで当時の悪王ヘロデに幼な子の居場所を訪ねると、王は驚きおそれて、祭司長や律法学者たちを集めて急遽会議を開く。そこで、旧約に預言されたベツレヘムであることがわかり、三人の学者たちは出かけて目的を果たす。このときも、また、同じ東方の星が先だって進み、幼な子のいるところでピシャと止まった（マタイ2：1－12）。そのあとは、天使がまた、ヨセフの夢に現れて、幼な子を皆殺しにしようとしているヘロデの魔手を逃れるため、幼な子イエスとマリアを連れてエジプトに避難するよう勧める。その後、ヘロデが死ぬと、ヨセフは前のように、夢の中の天使のお告げで、エジプトを出て故郷のナザレに帰り、そこに住むことになったという。これがマタイの一章から二章の福音記事のあらましである。

当時のわたしたちにとっては全くチンプンカンプンのイエスの系図、つづく、処女懐胎やそれにまつわるヨセフの夢物語、という荒唐無稽な信心物語。そんなところへ、どこからかひょいと星がでてきて旅人を導いたなどという児童劇、全く幻滅もいいところ、人生とは何か？というような究極の課題などとはおよそ縁もゆかりもないバカげたものとしか思えなかった。

現代科学も及ばぬ、透徹しきった虚空に大輪の華咲くがごとき、宗教的宇宙遊泳にも似た、まことに自由無碍の道元にみる禅の世界に比して、聖書物語は余りにも貧弱な稚拙きわまる宗教戯画でしかなかった。

それまでに、文学や哲学書などを通して、「山上の垂訓」とくに、その真幅八端のことや隣人愛を越える愛敵の教え、岩波書店の商標になっている「種蒔きのたとえ」、さらに十

字架と復活の物語など、おおづかみではあるが光となる福音書の知識は、キリスト教への私の関心を支えてくれていただけでなく、片山敏彦とか、三谷隆正のような、深いキリスト教信仰に生きておられた良き師に学ぶ貴重な体験もあった。にもかかわらず、聖書との直接の出会いはみじめなものであった。「出会い」というよりは、まさしく出会いがしらの激突事故に終わった。

Ⅱ　聖書との不幸な出会い

一　青年会

以上のように、学徒出陣にいたるまでの若き学生時代における不幸な聖書との出会いは、終戦後の復員、復学に続く東大時代において、思いもかけなかった一つの機会から、またさらなるキリスト教との激突を引き起こすことになった。

当時在籍していた法学部政治学科に通うために上京したのは、戦後まもなくの秋十月の頃だった。東大学舎の大半は幸いに爆撃の被害を免れて残っていたが、授業が正常化するまでには、なおほど遠い混乱の状況であった。それに、日本中どこも、貧困のドン底にあった時だけに、落ち着いて勉学のできる環境ではおよそなかった。そんななかで、町会長がわれわれ学生に青年会をつくるようにと呼びかけられた。当時の米軍司令官マッカーサー元帥がクリスチャンであり、その折々の演説の影響もあったのか、あるいは、カトリックもプロテスタントも、その他のキリスト教派も一斉に日本全国にわたって再宣教を競ってはじめたためか、「バイブル・クラス」を作ろうという提案がでてきた。ところで、困ったことに、青年会のなかには、クリスチャンが一人もいなかった。青年会の会長と、そのときの議長であった私は、かつての、にがい思い出しかない聖書を読むことなどは真っ平だった。しばらく、皆が黙ってしまった。すると、一人の青年が手を上げ、私に向かって、「おまえ、坊主のような顔をしてるから、やれ！」と大声でいった。一瞬、たじろいだ。「坊主のような顔」といわれたのも、心外だった。それに、彼自身が寺の息子ということが分かり、大笑い。そのまま、気の進まぬ私に役がきまってしまった。

二　一人になっても……

引き受けたからには、やらねばならない。はたと困ってしまった。大の聖書嫌いの私である。聖書研究会の世話役などできない。良心的にもゆるされない。そこで、町会長を通じて、話をつけてもらい、初めてカトリックの修道院を訪ねた。吉祥寺駅から北に十五分ほど歩いたところにある「アルベルト・ホーム」という男子修道院である。連絡もすでについていたのか、すぐに出てこられたのが小柄なドイツ人宣教師ナーベルフェルト師であった。おだやかな、温かい愛につつまれた好々爺の感じだった。

用件を伝えると、すぐに尋ねられた。
「何人ぐらい集まりますか？」
「たぶん、十四〜十五名ぐらいは来ると思いますが…」と自信のない返事をした覚え。
「そこで、一つ条件があります」と切り込んでこられた。
「なんでしょうか」というと、しっかりした口振りで「あなた一人になっても続けますか」と問われた。一瞬はっとしたが、答えは一つしかない。「やめます」などと意地でもいえない。
「はい、続けます」と答えた。「では、行きましょう」ということですぐに決まり、毎週来てもらうことになった。
このひとときが、やがて私の生涯の方向を逆転させてしまうとは夢にも思わなかった。

三　聖書研究会

参加者は予測を越えて盛会、数人の修道女の姿も見られた。講義はよく知られた、マタイ福音書五章の「山上の垂訓」の箇所であった。話が終わると、いつものように質疑応答に入ったが、だれも質問しないので、司会者の私がする羽目になった。話題はなんでもよいということであったが、前から気になっていた奇跡のことを尋ねた。返ってきたのはきわめて正統なカトリックの公式的解答。
「キリストは神でしたから、病気や罪で苦しんでいる人々を癒したり、飢えている人に食べ物を与えて、ご自分が愛と慈しみの救い主の神であることを示すために、そうした沢山の奇跡をなさいました」
そこで、若気の至り、ムラムラとなって私は猛然と反論した。
「こんなに科学が進んだ現代社会にあって、そんな馬鹿げた作り話を信ずる人がいるということの方がよっぽど奇跡ですよ…」
それからの議論は全く平行線。両者とも一歩も譲らず、固い雰囲気になってしまった。参加者の多くが躊いたのか、次の会では、ぐっと減り、五人前後になってしまった。さらに、会をかさねる度に少なくなって、やがて二、三人の親しい友達だけ。それも、時々、用事があったりして欠席。ついに、一人になってしまうこともあった。しかし、男の約束、「ひとりになっても続けること」。しかし司祭館の部屋も借りにくくなって、戦災で壊されたままの聖堂の片隅で二人だけの勉強になったこともあった。そこで、場所を吉祥寺の修道院に移すことになった。それからは、参加者の顔ぶれが変わり、幾人かの東大生や修道院に近い東京女子大の学生など、その他の青年をまじえて勉強会は活発になっていった。私はますます気炎をあげて、「キリストは偉大な宗教家であったとしても神ではありえない。その奇跡は教祖を神話化する民間伝説にすぎない」といつも懸命に主張していた。しかし、不思

議なことに、ナーベルフェルト師は一度もその集まりに参加されず私にまかせきりであった。

Ⅲ　若き日の挑み

一　猪突猛進

生まれ年が猪であったせいか、戦中の特攻隊のごとく、わたしは、聖書とカトリック教会に真っ正面から頭をぶっつけていった。というのも、前に述べたように、聖書はキリストを神話化し、カトリック教会はそのキリストをさらに偶像化して、この二千年間、宣教や殉教の美名のもとに人類を欺いてきた元凶である、というのが、その頃の私の持論であった。そこで、長年の間にそのカトリック教会によってでっちあげられてきたキリストの仮面を剥ぎ落とさねばならないという使命感に私は燃え上がった。それからというものは聖書にみるキリストの虚像を否定する理論を固めるため、まるで気が狂ったかのように猛勉強を始めた。洋の東西を問わず聖書学や神学書を読み漁った。

二　虎穴に入らずんば虎児を得ず

さて、法学部は卒業したものの、肝腎の問題は、なお未解決。今となっては、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」とばかり、カトリック陣営の本丸に突入するしかない、と腹を決めた。やがて、カトリック神学の牙城といわれるものには、イエズス会とドミニコ会の二つの修道会があることを知った。そこで、当時、評判の高かったフランス人宣教師S・カンドウ神父のすすめと紹介でそれぞれ東京の上智大学と京都の聖トマス学院の門を叩くことになった。

ところが、今思えば、それも神の摂理というのか、全くヒョンなことで、二つとも流れてしまった。そこで、東大に逆もどり再入学、宗教学科に籍をおくことになった。

虎児を得るため虎穴に入ることはできなかったが、虎穴に向かって猛火をあびせる火炎放射器の製作には東大での講義は恰好の場となった。

学科主任岸本英夫教授は、法学部にいた頃からすでにモグリで聴講していたので、顔見知りでもあり、その生いたちにも関心があった。岸本先生はもともと、敬虔なクリスチャンの家庭に生まれ育ちながら、若くしてキリスト教に失望し、離教、宗教学者の道に入られたと聞いていた。講義の間に、折々口にされた言葉が思いだされる。

「宗教学者になろうと思うものは、どの信仰ももってはならない。なぜなら、一つの宗教に入れば、その信仰の色眼鏡で他の宗教を見るようになるからである。学問は、すべての物事を客観的に見る誠実な知性をもたねばならない。我田引水の主観的な見方はゆるされない。だが宗教というものは、信仰をもたなければ、その真髄がつかめない。これが、宗教学者のジレンマである。」

授業の合い間や終わりには、今はすっかり現代西洋風に模様替えをしてしまった、かつての「山上御殿」の足元にある「三四郎池」の水辺に腰をおろし、考えの溢れるがまま、日の暮れるのも忘れてノートを書き続けたのは、法学部時代からのことであった。雨の日は空いた教室やロックフェラー図書館の中にこもりながら、作業をつづけた。その間に年月は流れ、やがて二年半、論文の基本的部分はできあがり、新しい周辺的知識による補強作業に入りはじめていた。それもまもなく、終了、一九四八年六月半ば頃、論文が完成した。

その頃は、ワープロもなかったので、その後の仕事としては、再度、論文を読み直すとともに、清書するということであった。

三　蜃気楼：自己崩壊

ところで今思えば、愚かな悪戦苦闘のひとり相撲でしかなかった自我流の反キリスト論を書き終えたときは、それなりの満足感と、未来の大空を飛ぶ期待に胸もふくらむ思いであった。若かっただけに、疲労というより、次の飛躍をめざしてのひと時の解放感を味わうなかに数日が流れた。

そのある日のこと、東京武蔵野にある、井の頭公園の人通りの少ない小道をひとり散策していた。昼すぎ二時頃であったかと思う。突如、眼前に白亜の巨城が蜃気楼のように浮かんできた。と、見上げる間もなく、こちらに覆いかぶさるように、崩れ落ちてきた。天を引き裂く稲妻のような一瞬の心象ドラマ。

思わず足を止めると、その廃墟に悄然として立つ影のような自分の前に、二つのものがあった。まず、表紙はまっ黒、中は全く白紙の聖書。次に、気味悪いほど黒焦げになったちっぽけな木片のキリスト。生来、奇跡アレルギーの私であるだけに、思いがけない出来事に戸惑った。しかし、まもなく、その謎が解けてきた。

「白紙の聖書」とは、主題の欠落した聖書の象徴。事実、聖書の主題とは、キリストの奇跡と、その教訓にある。ところで、私が書きあげた論文の骨子は、その重要な二つの主題の否定にあった。まず、福音書の中の奇跡を一切否定。次に、比較宗教学、とくに、仏教との比較からの結論として、福音的教訓には他宗教に勝るものはなにひとつ見られないということであった。私の見た「白紙の聖書」とは、そうした聖書の全面的否定の象徴を意味していた。次に、「黒焦げの小さなキリスト」には、また別の意味があった。私には、キリスト自身に対する敵意や反感は全くなかった。むしろ、E・ルナンの見た「人類の比類なき師キリスト」の実像にこよなく憧れていた。そのため、奇跡によって神話化されたキリストの虚像を打ち壊すことに必死になった。しかし、その結果、白紙化された聖書から現れたキリスト像は、まさしく、惨めなまで黒焦げになった、ちっぽけなキリスト像でしかなかっ

た。キリストという虎児を求めて虎穴に入ろうとした私が、火炎放射器で猛火を浴びせた虎穴の奥に見いだしたものは、黒焦げになった小さな死体の虎児キリストであった。「白紙の聖書」と「黒焦げのキリスト」が、その直前に見た、崩壊する白亜の巨城と重なり合って、私は愕然とした。と同時に、魂の奥深くから、三つの言葉が突きあげてきた。

「論文は完全に間違いであった。奇跡のないキリスト教はあり得ない。」

次に、「今、私は、たとえ聖書に書かれていない奇跡であっても信じる」ということば。かく言う私の傍らに影のように立つもうひとりの私が、よろめくようにして倒れ、呻くのが聞こえた。「刀折れ矢尽きた。」

それからの数日は、今テレビで見る、無重力状態の宇宙飛行士のように、地に足が着かず、体も浮きあがった感じで一種の放心状態が続いた。しかし強烈なショックでありながら何故か不安も焦りもなかった。たとえば、エンジン・ストップの故障を起こした航空機のようなもの、墜落はしないで、風に乗るグライダーのように飛行を続けるにも似て、思考停止のまま、何も考えず、何も読まず、何も書かないまま、灰色の日が流れた。

そのとき、ふと、旧制一高時代、陵禅会での恩師、中川宋渕老師（一九〇七－一九八四）を思いだし、三島の龍澤寺を訪ねることにした。

四　福井大地震（昭和二十三年六月二十八日　夏時間十七時十三分）

美しい富士の麓の三島駅に着いたのは昼ごろ。龍澤寺のそばを流れる小川の橋の袂で竹皮に包んだおにぎりを食べ、山門に着いたのは午後二時ごろだった。事前に連絡もしないで訪れたため、老師は留守ということで、夕方の帰宅を待つことになった。庭に面した廊下で座禅をしていると、突然、廊下とそのガラス戸が激しく揺れた。「あっ、地震」と思ったが、その後間もなく、雲水さんを通して、福井大地震のニュースが伝わった。※

そのうちに老師が帰ってこられ部屋に通していただいた。戦中の学徒出陣以来久し振りということで、とてもよろこんでくださった。その日は、開山白隠禅師のご命日で、檀家からいただかれたうどんのご相伴になった。その間に、紆余曲折の魂の遍歴と、ここ二年余にわたるキリスト教との悪戦苦闘、そして、悲惨な挫折に終わった結末について話した。老師は、いつものように、温かい静けさを堪え、微動だにしない落ちついた姿勢で、私自身さえ説明しきれない数日前の摩訶不思議な出来事までの長い話に、注意深く耳を傾けてくださった。話を終えると、老師はおもむろに口を開かれた。

「今、あなたはキリスト教がよく分かったと思う。しかし、まだ頭でしか分かっていない。体で分かるためには洗礼を受けなさい」。

寂静の大喝一声。それこそ、晴天の霹靂というもの。老師からそのような言葉を聞くとは、全く夢にも思わなかった。

数時間前には、禅宗（曹洞宗）の総本山がある福井の大地震。開祖道元禅師と宋渕禅師の両者は、私にとってかけがえのない人生の先達であった。その禅の道に訣別してキリスト教の洗礼をうけよ、と命じられたときには、まるで、大地震のあとに、すぐ津波に襲われたようであった。

強いショックに、すぐに言葉もなく、しばし間をおいて、他の話題に移っていった。老師ご自身は淡々として、その場で茶をたてながら、ふるまってくださった。

その夜は、寺に一泊、翌日の早朝礼拝にあずかり、つづいて、老師の自室で、互いに向かいあいながらの二時間あまりの座禅は、老師との法縁の訣別の時となるとともに、その後は、互いに宗教、宗派の壁を超えて、より深い親密なかかわりをもつ摂理的な契機となった。

※昭和二十三年六月二十八日十七時十三分（当時夏時間）発生。マグニチュード七・一、三七二八名の犠牲者を出した。

Ⅳ　ダブルパンチ

一　公教要理

「キリスト教を体で知るためには洗礼を受けなさい」という思いがけない言葉を与えられて、中川宋渕老師にいとまごいをしたものの、実際にどうしたらよいものか、すぐには分からなかった。しかし、カトリック教会での洗礼のためには、「公教要理」（現在では「カトリック要理」）といわれる、問答様式にまとめられた神学の縮刷版に基づいて勉強する必要があることは知っていた。ところで、その本にもまた、残念ながら、わたしには、よい思い出がなかった。

まず緒言からして問題……。「宗教は人の道を完うし、完全な幸福を得るために是非必要であります。しかし、どんな宗教でもよいというわけではなく、唯真の宗教によってのみ、その目的を達することができます。そして、天主は御一体、真理は一つ、人の真の道も一つでありますから、真の宗教は唯一つあるのみであります。その上、天主に対する人の道は、人が自由に決めることではありませんから、真の宗教は天主の啓示し給うたものでなければなりません。幸い天主は人々に真の宗教をお示しになりました。」

禅仏教に熱中していた当時の若い学生時代のわたしにとって、上記のような、キリスト教だけを「唯一の真の宗教」であるという主張は全く受け入れられなかっただけでなく、その宗教的傲慢に堪え難い憤りを覚えた。

次に、第一課　人の目的：人は何のために、この世に生まれてきましたか。

「人がこの世に生まれてきたのは、天主を知り、天主を愛し、天主に仕えて、ついに、天国の幸福を得るためであります。」

この答えは、一瞬、わたしの心のなかに複雑な波紋をつくっ

た。生まれること、そして生きること、愛すること……まさに、人生の「大疑団」が、冒頭に取り上げられていることには、強い印象をうけ、共感を覚えた。だが、それに比して、答えの簡単さにあきれかえった。一生問いかけても答えのない、人生の最大の課題を、わずか、一行の答えで片付けられているのに愕然とした。宗教的大天才、釈尊にしても、その問いに六年にわたる瞑想を続けなければならなかった。達磨大師の「面壁九年」もしかり。「公教要理」の説明は、全く、実も花もない愚答でしかなかった。正しいとか、間違っているとかの次元ではない。誰にとっても、人生は考えれば考えるほど深い神秘であるはずなのに、余りにも簡単に整理してしまう要理の割り切り方が情けなかった。血も涙もない干からびた言葉。「正解であるとしても真実ではない」。そこでは、知性の論理と心情の論理とがかみ合わない。「複雑な心の波紋」と言ったのはそのことである。長年にわたって悪戦苦闘した聖書の場合とは別の文化的違和感に由来する躓きであった。まさに、カトリックにダブルパンチを喰わせた、否、逆に喰わされたとでもいうのであろうか。ともあれ、この二つの大疑団、「真の宗教とは?」と、「人生とは?」という問いは、受洗後五十年になる、今にいたるまで、形を変えてわたしの魂の奥深くに棲息している。現代神学ブームとなりつつある、「宗教対話」や、「福音の文化」という課題は、わたしにとって、キリスト教との衝撃的な出会いのうちにすでに端を発した永遠の課題であった。

二　子供教室

その頃ふと、どこからか、確かなひとつの声が聞こえた：教会に聞け。その時、「教会」という言葉の意味がすぐに掴めなかった。はっきりとしているようで、何か広く漠然としていた。とにかく、地図をみると、下宿に近い大森教会があることが分かった。うろうろしていても仕方がないと、腹を決めて、紹介状もなく、見ず知らずのその教会を訪ねることにした。戦後三年目、司祭館といえるようなものではなく、米軍払い下げの「かまぼこ兵舎」。太い針金でしばったドアを叩くと、神父が出てこられて、数分の立ち話。「公教要理を教えてほしいのですが…」というと、「うん、いいぞ。次の木曜日の朝、九時に来い」、「はい」と一言できまる。それが、数年前に帰天された恩師、「われらのおやじ」の名で知られた下山正義師であった。

ところで、その日、約束通り出かけていくと、数人の子供たちが部屋の中をかけまわって遊んでいる。九時になると、下山師が入ってこられる、子供たちはピンポン台を囲んでバタバタと腰掛ける。何が始まるのか分からないままに、私も彼等と一緒に遊ぶ。まず短い祈り。それから、約二十分ぐらいの話で終わり。解散。急いで子供たちは飛び出していく。私は一人取り残されてガランとした部屋にしばらくひとりぼっ

ち。狐につままれたように。それが最初のレッスンであった。行くところもなく、隣の建築中の聖堂に入って、一時間ほど祈るともなく、静かに思い巡らしていた。当て外れであったことはいうまでもない。しかし、なぜか、騙されたような気にもならず、憤懣も感じなかった。その時の話は全く子供向きの話。わたしには、なんの興味もなく、為にもならない事ばかりであったのは言うまでもない。ところが、奇妙なことに、その子供用の話を何回も繰り返し聞いているうちに、なにか、バック・ミュージックのように心地好くなり、そのあいだに、いくつも頭に浮かんでくる、神学の難問がブルドーザでどんどん整理されていくように思われた。

それから、子供要理教室が楽しくなってきた。それに、子供たちと遊ぶのも楽しかった。「幼子のようにならなければ天国に入れない」というキリスト教の福音的教育法であったのだろうか。とにかく「公教要理」の講義らしきものは、一度も教えられないままに二カ月ほどの時が流れた。自分で読み直したり、個人的に質問をして話し合ったりするうちに、いつの間にか頭と心とが整えられていった。

「蝮の裔よ、回心せよ！」※と、下山師が後ろからわたしの肩を叩かれたのは、その頃であった。ところで当時は、受洗のためには、一応、筆記試験を通らねばならなかった。下山師の部屋の中で答案を書かされた。「第一問　神の存在を論証せよ」。調子に乗って、十数枚びっしり書いたことを記憶している。ところが、第二問　聖母マリアの被昇天の日は何日か？　理屈っぽいことは得意であるのに、幼稚園児でも知っているこんな簡単な問題となるとお手上げ。不意をつかれた感じ。さて、そばの机を見ると「公教要理」がおいてある。悔しまぎれにカンニングと決めた。それも、受洗前の罪は、洗礼によって、すべて赦される、という都合のよいカトリック要理の教えを思い出した。「マリア様おたすけを！」と願いつつ、滑り込みセーフ。とにかく、学生時代には、プライドもあって、一度もしたことのないカンニングをやってのけた天国泥棒。それから、一九四八年十二月十二日（無原罪聖母公式祭日）、大森教会で下山正義師により受洗。

下山師は、わたしの受洗のための試験のことで、皆に、いつも、ヘンな自慢をしておられた。「オイ、あいつの答案に落第点をつけてやった。やたらと長く書きよったからな、アッハッハ…」第一問の「神の存在についての論証」のことだった。カンニングのことなどはどこへやら、まったく頭になかったらしい。ともかく、ちょうど五十年前の洗礼という出来事が、やがて、全く予期しない人生の方向を生み出していくことになった。

※参照ルカ3：7－9

奥村一郎先生「霊性の遍歴」への応答

討議者　西村恵信

実は私から奥村先生への応答を買って出たのですが、その理由はきっと奥村先生ならあまり難しい神学論争のようなことは仰しゃらない筈だという見込みと、もう何十年というお付き合いなので、やっぱり奥村先生の肚の内に入り込んで、あることないことを吐かせることが、この会におけるせめてもの私の役目ではないかと思ったからです。ところがそういう発想の甘さが祟りまして、今回、私は欠席を余儀なくさせられてしまいました。やはりふだん奥村先生はへらへらと気楽なことを仰しゃっておられても、しっかりと神さまに護られていらっしゃるようですから、恐ろしいことですね。

さて案の定、ご発題の内容を拝聴しますと、いわゆる「霊性」に関する難渋な神学というものではなく、それこそ言葉の本当の意味で霊性的な、およそ他者の客観的分析というものを寄せつけぬような、先生ご自身の柔軟に揺れ動く霊性の純粋な持続ともいうべきものの、先生自身による反省的吐露でありますし、したがって内容全体は完結的、体系的なものではなく、まだまだ流動的なもので、今後においてまだまだ深められていく可能性をいっぱい含んでいる底のものであります。ですからこれをいま外から評したり、その内容をあれこれ俎上に乗せてみても意味のないことと思います。とにかく霊性「遍歴」なのですから、遍歴はどこまでも遍歴であるべきではないか、と私は思います。

ともあれ私が奥村先生に抱く憧憬は、先生の背後についてまわり、先生の確固たる「霊性」を物しようとするためのものではありません。はっきり言って先生はクリスチャンであり、私は仏教徒です。お互いに信仰の上において断じて相容れない立場に立っているのであり、私はこの二つの立場の違いを曖昧にするような中間的なものを求める気持ちはさらさらありません。いくら親しくてもキリスト教徒のみなさんの信仰は、私にとってまったく他なるものであります。

そういう私がなぜクリスチャンである奥村先生に深い親しみを持つかといいますと、奥村先生のなかにはキリスト教で

は包み得ない、何かもっと深く大きなものがあるように感じるからです。それはキリスト教という形態をとるもっと以前のものと言いうるようなもの、あるいは私たちが知っているキリスト教よりも、もっと遥かなるものであるように私は感じとっております。

ところが他でもなくそういう先生に見られる「遥かなるもの」が、なんと私の中のどこかにある「遥かなるもの」と感応同交するのを、先生と歓談していてしばしば経験するのです。クリスチャンである奥村先生と仏教徒である私が対面しているとき、私が仏教徒の友達にさえ見出すことのない共感の地平が、奥村先生のなかにあるのを私は以前からずーっと感じてきました。どうかすると奥村先生という全人格に、私は平素自覚している自分自身よりももっと本当の自分を見出すようにさえ思います。つまり私は自分では手の届かない私のなかの私に奥村先生を通してお目にかかるような気がします。奥村先生と向かい合っていると、先生がそういう私を見てくださっているような気がします。歯の浮くようなキザな言い方ですが、実際そうなのです。

もし私にも霊性というようなものが授けられているとしたら、そういうわが内なるもう一つの遥かなる私を私以外の人を通して直観する能力ではないかと思います。そしてそれは決してこれはこうだと断言できないような、非常に不可思議な、「遍歴」的な、じつに自由自在な何ものかなのです。

実際、奥村先生と同様にそういうわが内なる私の霊性もいままで随分と遍歴を重ねてきましたし、今でもまだいかなるものに対しても同化しうるような自由さを持って私の中ではたらき続けているのを覚えます。これは私が恣意を持って制御することが出来ない超越的なものであって、いわば私に生得的に与えられた天性のようなもので、私はそのことを自分でも不思議に思います。

奥村先生が初め中川宗淵老師に出会って坐禅に親しまれた。それは先生の自発的な選択というよりも、まことに先生の深き霊性の胎動であったように思います。選択ならば先生がキリスト教となる時点で坐禅の方は陰を薄めてしまった筈です。逆にまた聖書に出会ってあれほど嫌悪の念さえ感じ、アンチ・キリスト的な卒業論文まで書きながら、なおも先生を洗礼に赴かしめたものは、先生の中にある先生を超えたものであったと言わざるをえないでしょう。もし先生がキリスト教信仰への道を選ばれた動機が、坐禅を止めてというならともかく、こともあろうに信仰のゆらぎを禅僧である宗淵老師に打ち明け、老師の「汝洗礼を受くべし」の一転語によってキリスト教徒への道が一挙に開かれたというのですから、これは先生の選択や決断によったのではなく、先生の中にあった先生以上のものの誘いに外ならなかったと考えざるを得ません。他者の一言が響くためには自己の内面にそれを受けるものが先天的に用意されていなければなりません。とりわけ禅僧中川

宗淵の呼び声が、求道者奥村青年を禅の方へではなくて逆にイエス・キリストの方へ向け変えらせたという理不尽なできごと、これは宗淵老師の霊性と奥村青年の中にあった霊性との、霊性的ハタラキの激突というべきであります。

私の理解します霊性というものは、このように日常的、自覚的な私を遥かに超えたものでありますが、しかもそれは日常的、自覚的な私よりもなお私に近い私として存在しているように思われます。私という一箇の人間は、しかしながらどこまでも私という自覚的限定的な生き物として毎日を生きており、決して霊性の影でもなく傀儡でもありません。つまり私の生活は決して自覚的に霊性的というものではありません。毎日をただ世界の状況と対応しつつ生きているに過ぎません。

具体的に私は仏教徒であり、とくに禅仏教の思想と実践によって毎日を過ごしていますから、キリスト教とはある意味で向かい合っているわけです。そういう意味で私は普通の仏教徒よりももっと仏教徒であろうとしているかも知れません。特にキリスト教徒との出会いの多い私は、キリスト教徒を前にすることによって、その分だけいっそう自分の信仰を確認してきたといえます。

しかもその確認はキリスト教に対して居直ろうとする戦闘的自己の確認というよりは、むしろキリスト教によって明らかにされる自己の半面性の確認です。今まで自己に見えなかった自己の半面を明るみに出されるような感じです。そして今までの自覚的自己が自分の半面でしかなかったことを思い知らされるのです。それは確かに私の深いところにある霊性の顕現でもあります。霊性のハタラキがなければ、自分の信仰にとっての負であるような一面がこのように素直な仕方で自覚的に受け入れられることはないと思うからです。

実際私の生涯を決定的にした私の信仰は、このようにしてはっきりと禅仏教であり、それは半面にキリスト教信仰の可能性をも含むような深い霊性に導かれております。まことに古歌に「分け登る　麓の道は多けれど　同じ高嶺の　月を見るかな」とある通りでありまして、我々はそれぞれまったく異なった道を歩みながら、しかもじつは深い一つの霊性に誘われているという事実に私は深い確信をもっております。

討　議

司会　八木　洋一

司会　まず、奥村先生に西村先生のレスポンスに対して一言戴いてから討議を始めたいと思います。先生どうぞ。

奥村　ただ今、八木誠一先生から西村先生のレスポンスをご紹介戴き、深いところを理解してくださっていると思うと同時に、もったいないなと思いました。西村先生とは、一九六七年の「禅とキリスト教懇談会」からご一緒させて頂きました。十年ほど経った「禅キ懇談会」で、それは宇治のカルメル会で行われ、そこにはラサール神父、押田神父も居られたが、お二人が「結局真理は一つだ」と言われたのに対し、西村先生が「私なら、キリスト教では救われない。禅でしか救われないと言う。もっと自己同一をはっきりさせるべきだ」と反論されたのを思い出しました。また、「禅キ懇談会」は、クエーカー教徒の方の提案で始まったが、仏教とキリスト教の対話がこの日本で育てられてきたのだということも思い出されました。

八木誠一　先生は、今、禅をどう思っていらっしゃいますか。

奥村　私は、カトリック神学には、今でも抵抗があります。その教理には硬い石のようなものがあって、それを消化してくれるのが禅なのです。「禅の霊性」が「三つ子の魂」のように残っている。私は、十年間スコラ神学に没頭しましたが、消化し切れませんでした。岩下神父も「日本人にはスコラ神学を完全に消化するのは不可能だ」と言われています。禅の自己追求のあり方は見事なものがあって、それが喉に引っかかったものを消化してくれている。禅は「霊性」という点で重要な意味を持つと思います。さらに日本的な霊性、自然ということを絡めてこれから考えていきたい。私にとって禅は「三つ子の魂」であり、キリスト教は決定的な「命」ということです。

花岡　一点だけお聞きしたいと思います。自己と霊性、自己と歴史的生命といった形で考えるとき、両者ともにいろいろに形成され、深まると理解してよろしいでしょうか。私は、どちらかがどちらかに消えるというのではなく、自己は霊性の呼びかけの中で形成されるもので、どこまでも消えることはないと思うのですが。

奥村　この問題は、私にとっても大きな問題です。ラサール神父は「私は、いわば頭で祈って来た。禅によって信仰が深められた」と言われた。私は、「個の霊性」カトリック神学用語を使えば「実体的霊性」ということ、「個の追求」ということを重視している。悟りとは決定的な自己実現であると思っている。しかし、カトリックには「よきサマリア人の喩え」に見られるようにその考え方を否定する。そこでは、禅

でいう「悟り」「自己実現」は、何があるかということでしょう。

禅では「個の完成」キリスト教では「徹底的な自己放棄による愛」を追求するという点での問題提起があった訳ですね。ここで思い出すのは、西村先生がクエーカー教徒にされた禾山禅師にまつわる話のことです。禾山禅師がある日托鉢された時のこと、農夫が重い荷物を積んだ荷車を引きあぐねているのを見た一雲水が、列を離れてその荷車を押したところ、それを見た禾山禅師は、そのまま帰山されその雲水に下山を命じられた、という話。それを話されたところ、クエーカー教徒の人たちが大変怒った。困っている人を助けないのは、宗教ではない、と。その後、大拙先生にこのことをお話になったところ、大拙先生は「そんな事はない。どんなキリスト者でもわかるはずだ」と涙を流されながら言われたという。この話には、仏教とキリスト教の違いが現れているとも思われるが、一方キリスト教もマリヤとマルタの話にあるような面もあると思います。

「自己形成を唯一のものとするか」、「他のためには自己をまったくむなしいものとするのか」、また「自己形成」か、「自他形成」か、ペギーの言葉「神の前には一人で行くな。皆で行けよ」にあるように、救いとは一人では救われない。皆でなくては、と思います。さらに、救いとは愛であり、愛とは自己完成であると思います。「自己の神秘」「自他関係の神秘」ということではないでしょうか。

本多　感想を一つと短い質問を二つさせて頂きます。感想とは、魂の遍歴というべきお話を伺い、パウロの回心を思い出しました。パウロは、「主よ、あなたはどなたですか」と。疑問の前に、まず「主よ」と呼びかけられたのですね。質問の一つは禅の霊性とカルメル会の霊性との関係。二つめはどこかで「私の心の表層はキリスト教、深層は東洋的、仏教的」と書かれていましたが、霊性そのものとしてはどうなるのでしょうか。

奥村　カルメル会の十字架の聖ヨハネの血の流れはオリエント、カルメル会は東方の香りがする、それは一つの慰めです。祈りについていえば、カルメル会は「沈黙の祈り」を強調する。Oraison（念禱）という言葉は英語にはならない。一日二時間はしなければならない。それが坐禅に近いといえば近い。十字架の聖ヨハネは又、「暗夜（dark night）の霊性」でも知られている。日本人はカルメル会に親しみを持つのではないでしょうか。十字架の聖ヨハネは日本人には親しまれるのではないかと思うのですが、エックハルトほどにも知られていません。イエズス会やベネディクト会のようなしっかりした西欧的なものがあるところに比べれば、西欧に於いては小修道会でしかないでしょうが、日本人には独特の親しみがあるのではないでしょうか。

「心の表層、深層」といった問題、これは救いの問題とい

うより文化の問題ではないでしょうか。日本人は、日本人の心を、文化を深めていけば、その中心においてどこの文化とも出会う場所がある。円とすれば。円はいくらでも拡がったらいいと思うが、中心は人間である。「全ての人は、一人の人である」というトマスの言葉をそのままスコラの言葉として言われるという事ができると思います。

上田閑照　先ほど霊性に関する会議に出られたというお話がありましたが、そこでどのような議論がされたか、お伺いしたいのですが。

奥村　オープニング・スピーチとしてカルメル会の総長が話したのですが、「霊性という言葉が神学の中で一つの市民権を取るのに、十年間論争が続けられた」と。

spirituality がメイン・テーマですね。それを使って全ての神学を見直そうというのですから。キリスト論も、秘蹟論も、三位一体論も、…。spirituality をめぐって十五くらい講演がありましたか。そこで、宗教対話は神学ではなく霊性である、神学では狭すぎる、と。religion という言葉も狭すぎる。spirituality といったら、全ての人間に当てはまるではないか。拡がりのある、誰も共通の場で話のできる、そして一番深い三位一体論が展開するのではなかろうか。カトリックは聖霊論が弱いといわれ、東方の方が強いですが、その反省もあったですね。

私はあるフランス人の神父に五年間、スコラ神学を習いました。徹底的にスコラに打ち込んでいる方は、私は一生これ以外何もない、私は骨の髄までトマスだ、というような方で、私は五年間喧嘩をしましたけれど、その方がお別れにご挨拶に行ったときこう言われました。「あなたが日本に帰ったら、我々がやっているような西洋の神学はやるな。我々はもう研究し尽くして、ごみを拾うようなごく小さな問題の研究しかできなくなっている。あなたは日本に帰ったら、信仰の根源となるような根本的な問題だけをしっかりと取り組んでほしい。それが、あなたが日本の神学を作る一番重要なことです」と云ってくれたので、感心しました。深い人は、広いと思いますね。

今回の spirituality については、東洋へと拡がってゆく時期が来たのかなという印象を受け、うれしい気もしました。

上田閑照　spirituality ということから神学を見直そうと。また、他宗教との交わりもそこからということだから、そこまで霊性ということが大きな意味で出てくるとすると、その集まりの中で、霊性とはどういうことか、その基本的な考え方がどのように出てきましたか。

奥村　円と中心を考えると、その中心にあたるものとして霊性を考える。ヨーロッパ人は言葉の世界のプロ、私はよく言うのだが、あなた達は言葉にすれば全て終わったと思っているが、言葉は焼き物の薪のようなもの、焼いて火にしなければ役に立たないのだ、と。東洋では言葉を超える、言葉の言

語的自己超越といったところがあると思います。そこが禅の持っているダイナミズムではないか。私は religion という言葉はだめだと。宗教は信仰に凝り固まりがちだが、その信仰を飛び出す、それが愛。愛の宗教、宗教と言わないで愛の現実と。隠された神、隠されたキリストという言葉がギリシャ的世界の内にある。スコラは、全て明るみに出そうとする。顕わにしないと信じられない。西欧では、言語によって論理が作られている。多様化社会の神学を考える中で霊性という言葉が重要視されるようになったと思います。

河波　質問ではなくコメントをしたいのですが。霊性がクローズアップされるのは、時代的背景があると思います。近代は理性の時代だと思いますが、近代の終わりということがある。霊性は理性という枠を超えるところがあって、理性中心主義から解放するという新しい時代への方向を持っている、それに仏教もキリスト教も共同して考えていくということがあるのではないかと思います。日本では、感性というものに霊性を発揮するようなところがあります。たとえば、芭蕉の句「あらたうと青葉若葉の日の光」日の光は感覚なのですが、その奥にある霊性を見てゆく、こういうところに日本人的な霊性論の積極的展開を考えることもできると思います。

奥村　今の教皇ヨハネ・パウロ・二世は、哲学が強い方、最近出された「信仰と理性」(fides et ratio) は、私はすばらしいと思うのですが、信仰と理性との対立ということはカトリックでは前世紀に大きな問題がありました。理性主義が出てきて。私は理性が超えられねば信仰とは結びつかないと思うのですが。その中にインドの霊性を高く評価しているところもありました。

武田　仏教とキリスト教という形で考えなくてもよいのではないかと思うのですが。普遍的な spirituality と洗礼とはどう関係するのか。洗礼を受けなければ spirituality は全面的に顕現しないのだ、という重要な意味があるとしたらどうなのか。

　先生は、先ほど「神学では狭すぎる、religion という言葉も狭すぎる」と仰しゃいましたが、spirituality でも狭いのではないか。キリスト教のニュアンスが強い気がする。nature の方が広いのでは。nature といってもいろいろな意味があるが、たとえば我々の方では自然法爾。

　また、それぞれの宗教の伝統を背負っていくことと、他宗教との出会い中でその伝統を破っていく方向と、それらがどう関係するのかなあと思うのですが。

奥村　自然ということですが、大野晋先生は、日本語には自然という言葉はなく、明治の中ごろに出てきた言葉であると言いながら、言葉がないということこそ最も深い言葉があるのだと。言葉になるには、そこに対象化されているということがある訳ですから。トーマスも connaturalis という。本性が一つになった時言葉がなくなる。

聖霊という言葉、確かに馴染みにくいかもしれませんね。しかし日本語では霊が乱用されすぎますね。新しい宗教など特に。霊性の神学は関係の神学ということ。スコラでは関係を二つに分けています。偶有的関係と超越的関係、後者は神が作られた時には切っても切れない本性的に一つである関係、目と光、耳と音などの関係を超越的関係 transcendentalis relatio といいます。我々は神なくして、他者なくして生きることはできない、という関係の神学は霊性の神学と同義語。「共なる救い」、あなたがいなければ私もいないという関係、共になること、一つになること、それが霊性の根底にあるのではないか。だから宗教同士で争うなどとんでもないことでしょう。一つであるのが本来の神の姿、イエスは争いなど愛を傷つけるものを癒していかれた。どうも言葉がまだ熟していないと思われるのですが。

「洗礼によって神の子となり、地上に生まれることによって人の子となる」ということで、これは基本ですね。しかし、これも実体神学になると規則、規則できますから。洗礼を受けないとキリストの体、ミサですね、それを受けることはできない。最近では、カール・ラーナーが「無名のキリスト者」ということを唱えていますが。